R8(2026)年 共通テスト追試『正徹物語』現代語訳

次の文章A～Cはそれぞれ、室町時代の歌人である正徹（しょうてつ）の『正徹物語』のうち、歌の詠み方について述べた箇所である。

東大合格 オンライン 敬天塾

A 初心のほどは、さのみくひぼり入りて案ぜず
初心者のうちは、　それほど　深く掘り下げて　あれこれ工夫して

とも、颯々（さつさつ）とやすく詠みならふべきなり。
考えなくとも、あっさりと　容易く　詠み慣れなければならないのである。

いかに骨を折りたれども、位さだまりたれば、
どんなに　（詠むのに）苦労したとしても、　（歌人としての）域〔＝熟達レベル〕が決まっているので、

上から見ればアさしたることもなきなり。
上の（熟達度の）人から見ると、特にこれというほどのことも　ないのである。

いかに案じたりとも、我が位ほどなる歌ならでは
どんなに　考え抜いたとしても、　自分の（歌人としての）域〔＝熟達レベル〕の歌以外は

出（い）で来ぬものなり。
出てこない　ものである。

ある人の歌三首に二首は本歌を取る様（やう）に詠める
ある（初心者の）人の歌が三首のうち二首（までも）が　本歌取りをしているように　詠んでいる

ことわろし。上古も本歌を取ることをば大事にして
のは　良くない。　平安時代以前（の歌人たち）も、本歌を取ることは　重大なこととして扱って

候（さぶら）ふ。上手の位になりて、恋・雑（ざふ）を季になし、
おります。　上級者の域になって、　恋や雑（の分類に入る歌）を季節（の歌）に変え（て詠み）、

季を恋・雑に取りなし、句の置き所をかへなどして、
季節（の歌）を恋や雑（の歌）に変え（て詠み）、　語句の　位置を　（本歌とは）変えるなどして、

心を別のものに詠みなしけるなり。
歌の趣旨を　わざと別のものに詠んだのである。

初心の時、本歌を取れば、わづかに句の置き所を
初心者の時に　本歌を取ると、　ほんの少し　語句の　位置を

かへたれども、心は同じものなり。
変えたとしても、　その趣旨は（本歌と）同じものである。

されば初心にて本歌を取ること、
それだから、　初心者の段階で　本歌を取ることは、

斟酌（しんしゃく）あるべきことなり。
差し控えなければならないことである。

B　得たる者の歌は、何事をいひ出でたるも、
（歌人として）熟達した者の歌は、　どのようなことを詠み出したとしても、

一ふしの興ありて面白きなり。初心者これを見て、
一か所（は）　心が湧き起こるものがあって、面白いものである。初心者が　これを見て、

心にうらやましく思ひて、詠み似せむとすれば、
心の中で　羨ましく思って、　似せて詠もうとすれば、

無心所着（むしんしょぢゃく）の何ともなくほれたることを詠み出だす
一首の意味が通らない、　何ということもなく、　ぼやけた歌を　詠み出すのだ。

なり。「これはィ何をあそばし候ふぞ」と人が尋ぬれ
「これは　何についてお詠みになりましたか」　と　人が　尋ねると、

ば、「我もえ知らず」といひて、たはごとを詠むなり。
「自分でもよく分からない」　と言って、　戯言を詠むのである。

よくよく慎むべきことなり。
（これは）くれぐれも慎まなければならないことである。

初心の時は、ただうちむかひて、一首がさはさはと
初心者の時は、ひたすら（詠み表したい対象に）心を向けて、一首がすらすらと

理（ことわり）のきこゆるやうに詠むべきなり。
筋が通って聞こえるように詠まなければならないのだ。

その位にも至らずして、達者のまねをすれば、
その域に［＝達人の域］にも達しないで、達人の模倣をするといつも、

をかしきこと出で来るなり。
奇妙な歌が出てくるのだ。

C 了俊（れうしゆん）常に申されしは、「我、若年の頃、連歌を
（私の師である今川）了俊が常に申し上げなさっていたことは、「私は、若い頃、連歌を

稽古し侍（はべ）りしに、よくもなき句を多くせむよりは、
修行しておりました時に、良くもない句を多く作るよりは、

五句三句なりとも、我が本意の連歌をすべしと
五句三句であっても、自分の望み通りの連歌をしようと

思ひて、句数を少なく申し侍りしを、
思って、作る句の数を少なくしておりましたのを、

摂政殿きこしめして、了俊の状をささげられし時、
（連歌の大成者である）二条良基殿がお聞きになって、了俊が（良基殿に）書状を差し上げなさった時、

その状の奥を引きかへして、『御辺（ごへん）のこの間
（良基殿）その書状の余白に返事を書いて、『あなた［＝了俊］がこの頃、

よき連歌をすべしとて、句数少なくせらるるよし
良い連歌をしようと思って、句数を少なく作っていらっしゃるということを

聞き待り。しかるべからざることなり。
聞いております。（それは連歌の練習方法として）あってはならないことだ。

一句二句をみがきて、随分よき連歌と存ずれども、
（自分では）とても良い連歌だと思っていても、
上の人の目から見れば、まだ初心の田地（でんち）にて、
上の（レベルの）人の目から見ると、　まだ初心者の境地であって、
さらによき句にてはなきなり。
決して　良い句では　ないのだ。
されば初心のほどは、いかにも多く口軽（くちがろ）にし
それゆえ　初心者のうちは、　どのようにでも、数多く　気軽に作って
もてゆけば、自然（じねん）に上手にもなるなり』と
だんだんと（連歌の道を）進んでいくと、自然と上手にもなるのだ』と、
ことのほか御折檻（せっかん）ありし」とて、予がよき歌を
格別に　厳しいお叱りがあった」　と言って、　私が　（量より質を意識して）良い歌を
詠まむとするとて、文書をして折檻ありしなり。
詠もう　とすることに対して、　手紙を書いて　厳しいお叱りがあったのだ。
常には摂政殿の御諚を申し出だして、「これが
（了俊は）常々、二条良基殿の　お言葉を　口に出し申し上げて、　「これ（こそ）が、
いかめしき御恩なり」と申されけり。
畏れ多いご忠告である」　と申し上げなさった。

問4【資料】

※句ごとに空白を追加し、下の句の始めで改行しました。

Ⅰ 名取川（なとりがわ） 瀬々（せぜ）の埋（う）もれ木 あらはれば
いかにせむとか あひ見そめけむ

（『古今和歌集』恋歌三・よみ人知らず）

（名取川の浅瀬の水面に埋もれ木が姿を現すように、
私たちの関係が世間に知られたらそのときは
一体どうするつもりでひそかに逢いはじめたのだろうか）

Ⅱ 名取川 春の日数は あらはれて
名取川の　春の日数が重なったこと〔＝春が深まったこと〕があらわになり、
花にぞ沈む 瀬々の埋もれ木
（水ではなく）散り積もった桜の花の中に沈む浅瀬の埋もれ木だなあ。

（『続後撰（しょくごせん）和歌集』春歌下・藤原定家）

Ⅲ 名取川 いかにせむとも まだ知らず
名取川（という名のように私たちの関係が世間に知られたら）どうしようかということも、まだわからない。
思へば人を うらみけるかな
考えてみると、（世間体の不安よりも、私にこんな思いをさせる）あの人を恨めしく思うのだなあ。

（『続拾遺（しょくしゅうい）和歌集』恋歌三・藤原定家）

*『古今和歌集』は平安時代、
『続後撰和歌集』『続拾遺和歌集』は鎌倉時代の勅撰（ちょくせん）和歌集。